

第7回 JLPP 翻訳コンクール 仏語部門講評

明治学院大学文学部フランス文学科名誉教授

ジャック・アンリック・レヴィ

小説部門

川上弘美の「夏休み」のような短編小説を仏訳するにあたって、最も切実な問題としてあるのは時制の選択であろう。というのも、従来の物語調の単過去/半過去を軸にして訳してしまうと、この短編が放つ現代文学的作風が損なわれ、幻想的童話の側面が必要以上に誇張されてしまうだけではなく、一人称で語られることによって築かれているはずの、主人公を対象にする語りと話者の発話の不一致が生じてしまうからである。最優秀賞のアケレル樹里氏はあえて複合過去を軸にすることを選び、この時制が強いる未完了というアスペクトによって生じがちなぎこちなさを高度な文章のスキルによって補い、原文固有の「発話性」および主な主題でもある時空の「ずれ」をめぐる表現のニュアンスを、群を抜いて、見事なまでに再現することに成功している。

優秀賞のハラルド・ウェンドラー氏の訳は、単純過去を用いているため、ところどころ構文に鮮やかさ、というか「うまさ」が欠けてはいるが、全篇における時間の流れや対話のメリハリをかなり正確につかんでいて、落ち着いた良質な出来栄えに至ってはいる。

優秀賞のもう一方、ジェラルディンヌ・ウダ氏の場合、単純過去の用法は、少し砕けた言葉遣いも加わって、むしろ童話性、一種の幼さといった味わいを深めてしまっているが、創作性とリズムに富んだ翻訳の文は、原文が秘める切なさを繊細ににじみだして、好感を生む出来ではある。

評論・エッセイ部門

「言葉の外へ」と題された保坂和志のいわば文学論は、批評の専門用語をなるべく省いて、この作家特有の論法と日常的な「普通言語」としての日本語の表現力の可能性を最大限発揮して書かれた「文庫まえがき」である。原文の特色を生かしながら、普通言語による表現でありながらも決して容易につかみ取れる透明度の高い論述ではない文章の仏訳に多くの候補者が熱意をもって挑んだ。その中でも、原文のなかで繰り広げられている議論を最も厳密にとらえ、それをフランス語が提供する最大限の表現力を用いて読み解くことに成功していると思われるのはハラルド・ウェンドラー氏の訳である。逐語訳か意識といった選択からは遠のいて、言語の解体と再構築に徹した見事な翻訳技術が披露されている。

アケレル樹里氏の訳も原文のいささかギザギザとした構成を正しくつかん

でいて、その論述の進展を（どちらかといふとなめらかすぎるフランス語によって）再現することに成功している。ただ、フランス語文における接続の切り替えを試みるなど、大胆な工夫を避けているため、原文にある息切れに近いような迫力を伝えきれてはいない。

それとは対照的に、ジェラルディンヌ・ウダ氏の訳は、著しい読み違いがなくもないものの、読み砕く力に満ちていて、ときには斬新な創作的表現によって、原文にある潜在的要素に意外な照明を当てていて、フランス語文体の波が不思議にも呼吸を共にしているかのように、フランス語の読者にこの作家の日本語をじかに味わわせているようにも思える。